

アカンサス

安藤 晃二

コロナ禍の外出自粛の鬱屈に悩まされ、もう限界と、時折自然の中に呼吸の自由を求め、夫婦で出かける。

早春に楽しんだ府中の梅園は六月のアジサイが良いと聞き、訪れると、梅園脇の広大なドライフラワー様の原がいま七変化達の大群落に変貌していた。見渡す限り白色のアジサイの植栽を山法師が上から取り囲み、白の世界を堪能する。帰り際に出口の叩きに置かれた一鉢の花に目が留まる。

すつくと立った人の背丈を超える茎を取り巻く無数の鞘状の花房はピンクのグラデーションを成し、その下に白い花びらがのぞく。根元には美しい葉が茂る。鉢に立てかけた黒板には、御覧じるとばかり、白墨で「アカンサス」とある。ギリシャの国花と聞けば、なるほどヘレニズム風美人の雰囲気である。ギリシャ神話に言われを辿る。光と芸術の神アポロは美しいニンフ、アカンサスを見初める。振り向かない乙女にアポロは少々品性を欠いたアプローチを仕掛けるのだが、負けていないアカンサスは、アポロの顔に爪を立て、最高位級の神の「愛」を拒絶する。アポロの怒りと復讐がアカンサスを植物に変えてしまう。

中学生の頃、古代ギリシャの円柱に関し、ドーリア式、イオニア式、コリント式の様式名を学んだ。アカンサスの葉の美しさを図案化したコリント式は、紀元前五世紀前半の建築家で彫刻家のクロマチュウスにより創始された。後年古代ローマの作家ウィトルウィウスが解説する。

冬のある日、コリントでひとりの若い女性が病死した。棺は墓地に運ばれ地上に安置され大理石のタイルが乗せられた。翌春、棺の下のアカンサスの根から花茎が棺の重さで斜めに伸び変形する。情景を偶然捉えて天才的な芸術性を発揮したのがクロマチュウスであった。ウィトルウィウスはその著書「建築について」の中で、様式美を創造したクロマチュウスこそ、紀元前二十七世紀にエジプト最古の、サッカラのピラミッドを建設したイムホテップの伝統を引き継ぐ芸術家であると絶賛している。